

JCV journal

2023 Summer Vol.21-A



海外支援情報

支援国の視察レポート

ラオス人民民主共和国

3/26(日)~4/1(土)、9名の支援者さまと一緒に、ラオス現地視察を実施しました。ラオスへの子どもワクチン支援は、2007年にUNICEF ラオスと保健省から要請を受けて支援を開始して以来、今年で16年目を迎えます。

コロナ感染拡大の影響もあり、約5年半ぶりとなった今回の視察では、ラオス南部のチャンパーサク県、アッタプー県を主に訪問。ヘルスセンターや村の寺院などで、子どもたちにワクチン接種される様子、また、支援した保冷庫がしっかりと稼働している様子などを確認してまいりました。

現地のUNICEFや保健省から報告を受けた最新の状況、視察に参加された支援者さまの感想などを交えて、視察の様子をお届けします。



ラオスの地図



ラオスの空港

子どもたちの命を守るための地道な努力

今回視察したラオス南部のアッタプー県サケア村にあるヘルスセンターで院長を務めるフィラポンさんは、周辺の地域に住む6,500人の人々の命と健康を守っています。

このヘルスセンターでワクチンを接種する子どもたちは、1か月に約250人。なかには、山岳地帯などで来院が困難な地域もあるため、フィラポンさんたちは、時にはバイクにワクチンを載せ、未舗装の道路を走って、出張ワクチン接種にも出かけます。

「私は一人でも多くの人を助けたくて、この仕事に就きました。子どもたちの命を守るためなら努力は惜しみません。」とフィラポンさんは語ってくれました。

医療ボランティアの活躍

フィラポンさんと一緒に働くスタッフのうち、3名は医療ボランティアです。ラオスでは現在、国の財政の厳しさから、看護師の新規採用を積極的に行えず、看護師が不足している地域のヘルスセンターでは、医療ボランティアが活躍しています。

医療ボランティアの1人に話をお聞きしたところ、「看護師になるために自分が学んだ知識と技術を、地域の子どもの命を守るために活かすために、ボランティアを続けています。活動は大変なことも多くありますが、小さな命を守るために、協力して毎日頑張っています。」と笑顔で語ってくれました。

ラオスでのワクチン接種には、まだまだ課題も多くありますが、現地の人たちのたゆまぬ努力により、アッタプー県においては、接種率が98%に達し、子どもたちの健康が守られています。



サケア村ヘルスセンター院長フィラポンさん



ヘルスセンターでのワクチン接種の様子



医療ボランティアの女性



ヘルスセンターでワクチン接種を待つ母子

～ ワクチン支援の現場を視察して～

ワクチンの接種会場で順番を待っている子どもたちやそのご両親、小学校で元気に遊んでいる子どもたちと触れあうことで、弊社が続けている寄付活動を、これからも継続していく義務を強く感じました。

私が今の会社に入社して6年経つのですが、今回触れ合った子どもたちが、その当時の寄付活動で贈られたワクチンを接種して元気に成長できたことを考えると、とても胸が熱くなりました。今までは、弊社代表から聞いた視察の様子をお客さまや社内で話すだけでしたが、今回、実際に視察に参加したことにより、寄付活動について、自分の言葉で話ができるようになると思います。

これから、しっかりと伝える、という新たな役目が加わり、より一層仕事をしていく意味を見出すことができた、非常に感慨深いツアーとなりました。

株式会社スタンディングポイント 松岡 利昌さま





認定 NPO 法人
世界の子どもにワクチンを 日本委員会

JCV journal

2023 Summer Vol.21-B



海外支援情報

支援国の視察レポート

ブータン王国

6/3(土)～6/11(日)、JCV職員2名で、ブータン現地視察を実施しました。ブータンへの子どもワクチン支援は、2008年にUNICEFブータンと保健省から要請を受けて支援を開始して以来、今年で15年目を迎えます。

2018年以来、約5年ぶりとなる今回の視察では、首都ティンブーがある西部から移動し、中央部のブムタンを經由して東部のモンガルまで足を伸ばし、ワクチン接種の様子だけではなく、支援した保冷庫が設置されている、モンガルの病院も視察しました。

現地のUNICEFや保健省から報告を受けた最新の状況、インタビューを行った病院や診療所のスタッフ、親御さんの感想などを交えて、視察の様子をお届けいたします。



ブータンの地図



ブータンの飛行機

ワクチンを無駄にしないモニタリングシステム

首都ティンプーにある中央ワクチン保冷庫では、ブータン全土の保冷庫の温度を、リアルタイムで監視するモニタリングシステムが稼働していました。

各拠点で保冷庫の温度を監視できるため、温度の上昇見られた場合にすぐ分かるだけでなく、温度上昇があった保冷庫の管理者や地域全体を管理する拠点に、すぐに連絡が行く仕組みもあり、二重三重の管理体制が敷かれていました。

「機器の故障や人的ミスがあっても、皆さんから支援して貰ったワクチンを無駄にしないため、しっかりとした管理体制を作る努力をしています。」と国家EPI(予防接種拡大計画課)技術者として働くセリング・ワンチュクさんは話してくれました。



システムの説明をするセリング・ワンチュクさん



ヘルスセンターにワクチン接種に訪れた父子

徹底した温度管理で守られる子どもたちの笑顔

ブータン中央部に位置するブムタン県のウラ・ヘルスセンターでは、子どもたちのワクチン接種履歴の管理システムとワクチン保冷庫を見学し、親御さんへのインタビューも実施しました。

ヘルス・アシスタントのチミ・ドルジさんは、「子どものワクチン接種履歴は、全国でシステム管理されているため、接種予定日を逃してしまった子どもも簡単に把握でき、個別連絡を取るなどきめ細かくケアすることができます。」と話してくれました。

インタビューに応じてくれた、4人の孫をもつおばあちゃんは、ワクチン接種スケジュールを把握するほどに孫を大切に思い、ワクチンの役割も理解されていました。感染症にかかる人々もいた彼女が小さい頃とは違い、ワクチン接種が広がった今では、感染症は見かけなくなった、と笑顔で話してくれました。



管理システムの説明を受けるJCVスタッフ



インタビューに応じてくれたおばあちゃん

ブータンの子どもワクチン接種を支えるもの

12年ぶりに訪れたブータンは、ワクチンや予防接種の管理においてデジタル化が進むなど、とても大きな変化が見られました。そしてその効果は、ほとんどのワクチンが97%前後を保っている、高いワクチン接種率にも表れています。

そして、それを支えているのは、「子どもたちの命を守りたい」「ワクチンを無駄にしない」という、昔から変わらないブータンの人たちの想いです。その想いがデジタル化を進め、また、必要に応じて自宅に持ち帰ってまでワクチンを管理し、さらに、車で2時間と歩いて8時間をかけての出張ワクチン接種を、当たり前のように行う、医療スタッフの仕事の源にもなっています。

皆さまからブータンに贈られたワクチンは、現地医療スタッフの想いによってしっかりと護られ、子どもたちの笑顔につながっていました。

ドナーケア 兼 広報・啓発・教育グループ グループ長 高橋 昌裕



立ち寄った学校の子どもたち